えくてびあん

12
立川と語ろう　立川に生きよう
DECEM[illegible]

表紙の人／伊藤公代（上砂町）　撮影／細江英公

くらふと画報⑪　協力：立川市クラフト同好会

竹細工のエビ

逸品は「竹ボウキ」が決め手

竹で作るクラフトはこれまでもいくつか紹介してきたが、今月は極めつけ。ここまでくると、アートの領域にまで踏み込んでしまったという感も。立川市クラフト同好会の星さんは、旧国鉄は技術開発部門で活躍されていた。手先の器用さは云うまでもないが、見栄え良く仕上げるコツは器用、不器用とは別のところにあると云う。「パーツ選びが最も大切。脚となる細い枝は、竹ボウキの穂先から、節の部分をバラつきなく選ぶようにしてください」（星さん）。シンプルな花器にさりげなく添えるなど、装飾品として用いても面白い。

今月の先生
星　進　さん

1　本体となる竹を切る。直径1.5cmほどの太さで長さは10cm位。庭の花の支柱にしていた竹など最適。

2　本体の形づくり。小刀やナイフで削っていく。ノコギリで切目を入れてから行うとやり易い。

3　こんな感じで本体は完成。頭は細く、腹と尾は切れ込み。これだけでエビの姿に見えるから不思議。

4　脚と眼の部分に印をつけ、キリで穴を開けておく。あまり大きく開け過ぎないように。

5　竹ボウキの穂先から脚となる枝を集め、本体の穴に差し込む。枝分れする節の部分を関節に見立てる。

6　長い前脚と眼を入れて完成。前脚はライターの炎などであぶるときれいに曲がり、見栄えも良い。

こうしか生きていけない人間なんですよ。

童話作家 森 忠明さん

啓介　森さんの作品に出てくる主人公はナイーブで、子供なのにどこか諦観してるような、そんな印象がありますけれど、森さん自身も実際にああいう少年だったんですか。

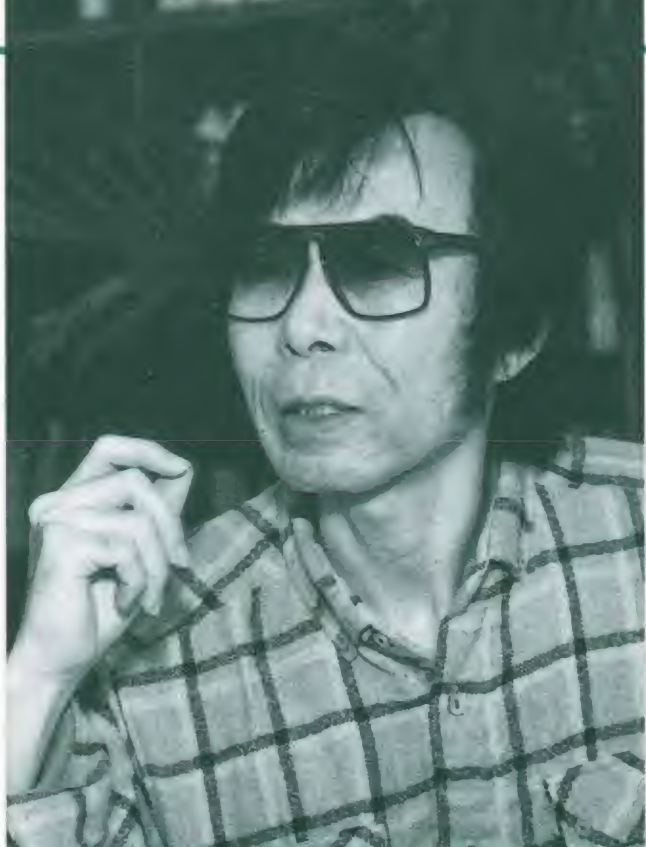
森　僕ね、小学校五年生で神経症を患ってるんですよ。

啓介　小学生で？　そりゃ早いなあ。

森　四年生までは立川ではけっこう神童で通ってたんですが（笑）、五年に上がってから登校拒否児になっちゃって。二年間ぐらいブラブラしてたんです。

啓介　何かきっかけがあったんですか。

森　担任がちょっと嫌な先生でね。子供心にも信用できないような人で。それからいろいろ考え込むようになっちゃって、共済病院の精神科に通ってたんです。

啓介　小学生としてはきつかったでしょう。登校拒否なんて当時はまだ珍しかったんじゃないですか。

■森忠明（もりただあき）／作品の舞台はほとんどが「立川」。ローカルを突き詰めることで普遍的な視点を獲得するという稀有な創作スタイルを貫く。いまや不動の童話作家である。十代で寺山修司と邂逅、演劇実験室「天井桟敷」に参加し作家活動を開始。昭和47年からフリーに。NHK賞、新美南吉児童文学賞、野間児童文芸賞などを受賞。著書に『へびいちごをめしあがれ』『ホーン岬まで』『みねうちごっこ』など。最新作『グリーン・アイズ』で、昨年赤い鳥文学賞を受賞した。昭和23年生まれ。錦町に在住。もちろん生粋の「立川人」。
■立井啓介（たていけいすけ）／えくてびあん編集人。

森　でも精神科の先生が素晴らしい方で、それに中学の美術の先生が、なぜか僕に目をかけてくれて。その二人に出会わなかったら、ちょっと危なかったですね。

啓介　そういう少年時代を過ごした森さんが後に寺山修司に師事することになるというのは、やはり出会うべくして出会ったという感じですね。

森　十八ぐらいの時ですか、寺山さんが選をしていた雑誌の投稿欄に詩を送ったんです。どうやらそれを気に入ってくれたらしくて「詩のサロンを開くから来い」って連絡があったんですよ。で、出掛けていったら、いきなり「天井桟敷」の文芸部という部門に「森忠明」って名前があって（笑）。

啓介　森さんからご覧になって、寺山さんはどういう人だったんでしょうか。

森　僕もその頃は若くて生意気でね。例えば、公演を行うのに皆でチケットを売るんです。それぞれ何十枚と渡されて売らなきゃいけないのに、僕はそれを頑なに拒んでいて。「僕はそういうの嫌いなんです」とか云ってね（笑）。でも寺山さん、怒らなかったなあ。

啓介　懐が大きい。

森　大きい人でしたねえ。今になって振り返ると冷や汗かいちゃうんですが（笑）。よく「誉めて伸びるのは森と丸山（美輪明宏）ぐらいだ」って云われてたんですよ。誰だって誉めてもらった方がいいと思うんですけど「いや、だいたいは厳しくした方がいいんだ」って。

啓介　じゃあ誉められてばっかり？

森　まあ「君は時々いい作品を書くね」なんて感じで。そう云われて、また生意気にも「時々ですか」なんて云い返したりして（笑）。

啓介　でもそれは、森さんが寺山さんに対して畏敬の念を抱いていたからこそ云える軽口であって。

森　そうなんです。やっぱり全てにおいて敵わないとは常に思っていましたから。結局、僕が児童文学の世界に進んだのも、寺山さんが唯一手がけていない分野だったからなんですよ。寺山さんは分析型なんですけど、僕としてはもっと不用心で、素直な感じでもいいんじゃないかなと思い始めたんですね。それで「立川に籠もって勉強します」って寺山さんに暇をいただいたんです。

啓介　森さんの小説には、当初から「死を見つめる」といったトーンの作品が多いでしょう。子供向けということで、そういったことは意識しませんでしたか。

森　どうも児童文学の世界では書いちゃいけないことを書いてたようなんですね。だから最初、業界ではずっと無視されてたんです。僕自身も無視されてたことに気づいてなかったぐらい疎かったというのもあるんですが（笑）。そのまま書きたいことを無手勝流で始めちゃったし、むしろそれしか出来なかったんですね。

啓介　でも、今となっては逆にそれが良かったんじゃないですか。死生観は文学の大きなテーマでしょう。

森　別にニヒリズムとかペシミズムに陥っているわけではないんですけどね。表面的な明るさとか愉しさだけではないものを見つめていく感じはありますね。

啓介　ところで森さんにはお弟子さんはいるんですか。

森　そう呼べるのは二十人ぐらいいます。

啓介　皆さん、やはり文学を志向されてるわけですか。

森　それがね、違う世界で成功してる人の方が多いんですよ。コマーシャリズムとかアニメーションの分野で活躍してたり。僕と同じタイプはなぜか一人もいないんだ（笑）。

啓介　それは、寺山さんと森さんが違うタイプだったということと同じように？

森　うーん…。これを云っちゃうと自分も年をとったなあと思うんですけれど、僕にとって文学というのは「それがないと生きていけない」存在としてあるんですね。ところが若い人を見ていると、どうも違うようなんですよ。それぞれ優秀な大学を立派に卒業して、実業の世界でも充分やっていけるようなバイタリティも持ってるし。

啓介　ああ、なるほど。「つぶしが利く」わけですね。

森　例えば太宰治が「学問なんか捨てろ、もっと弱気になれ」というようなことを云ってたと思うんですが、若い連中はその「弱気」ということがわかってない。

啓介　「オドオド感」というか。

森　そうです、そうです。自分の内の不安と向き合う恐怖感とか、そういうものとはどうも無縁のようですね。僕なんかだとこれしかできない、こうしか生きていけない人間なんだという後ろめたさが常にあるんですけれど。

啓介　文学がファッション化、あるいは商業化しちゃってるのかも知れない。でも森さん、戦後の教育ってのは、云ってみれば「強気教育」なんじゃないですか。

森　おっしゃるとおりだと思います。僕ね、中学三年の時『徒然草』を全部読んだんですよ。

啓介　国語の授業ではサワリの部分をちょこっとやりますよね。

森　ええ。授業でやって「この人は面白い」って思って全部読んだ。で、ここに書かれていることは、要するに「がんばらなくていいよ」ということなんだってわかっちゃったんですよ（笑）。あれで僕は随分救われたなあ。

啓介　ええ、ええ。「ドロップアウトしてもいいんだ」ということですよね。

森　よく学校の先生の勉強会みたいなところに呼ばれて講演を頼まれるんですが、そこで僕はいつも「この中で『徒然草』を全部読んだことがある方はいらっしゃいますか」と訊くんですね。すると一人もいないんです。ちなみにそこにいるのは、全員国語の先生なんですけれど（笑）。

啓介　学校の国語教育と、文学教育というのは別モノと云わざるを得ない。

森　僕は教師から教わる内容ではなくて、その教師の姿や仕草を「観察」することが文学だと思うんです。学校で生身の先生から授業を受ける意味というのは、実はそういうことなんじゃないかなと。

啓介　学校は必然的に「正解」を求めるところですからね。文学は本来、それぞれの感じ方を許して、認めるものですし。

森　僕のようなどうしようもない落ちこぼれが、恥ずかしさを抱えつつ「オレも生きてていいんだ」と思えるものであってほしいというか。

啓介　世の中には「正解」の文学しか残らなくなっちゃうんでしょうかねえ。

森　世間的には全く無名なんですが、僕には大好きな詩人がいるんです。金が貯まったら詩集を出して森に贈るよ、なんて云っときながら、結局全部呑んじゃうような人なんですけど。でもその人にとっては創作は生きることなんですよ。詩がなければ生きていけない。彼のような人に出会うと本当に胸を打たれます。シンパシーというよりも、もう感謝の気持ちです。

啓介　よくぞ、生きていてくれたという感じですね。

森　ええ。本屋や図書館にたくさん並んでいる作家よりも、僕にとっては彼のような人の方が「大メジャー」なんです。

「赤い鳥文学賞」受賞の最新作
「グリーン・アイズ」（小峰書店）

古民家園の見方

**150年前の姿のまんま、砂川の大地にどかっと建ってる
川越道緑地・古民家園内「小林家住宅」。
自然の摂理を巧みに取り入れ、快適に過ごせる建築構造、
粋と格式に満ちた建具や欄間のデザインは、
当時の大工さんたちの、知恵と技術の結晶。
厚く盛られた茅葺きの屋根を見ていると、
浮き足だった日常をしっかと押さえてくれるようだ。**

●表から入ってすぐに見える立派な上大黒柱。民家にとっての精神的支柱。現在、大黒柱が"存在"する家はどのくらいあるのだろう。

●「**オク**」と呼ばれる最上級の部屋。床の間には棚棚、縁側に張り出した付書院は書院造のスタンダードデザイン。この家をタダでは済まさぬものとする所以が、この部屋の至るところにつまっている。。

●「**トバノオク**」と呼ばれる部屋から。部屋を仕切る戸も襖や鏡戸など様々。この先の部屋の意味合いを暗示する役割を持っていた。

●風呂桶ひとつの「**フロバ**」はリサイクルの原点。床が簀の子になっていて、こぼれた水は下に蓄え、生活・農業用水に使用した。。

●家人の食事の場「**オカッテ**」。囲炉裏の煙は暖房だけでなく害虫の駆除にもなる。家族の集う真ん中には、かつて暖かい炎があった。

●屋外でもなく屋内でもない、不思議な空間。縁側のあいまいな美しさは日本人にしか分からない。

●「**オカッテ**」北側の無双窓。時間帯や季節により開け具合を調節することで、空調の役割を果たす。目立たぬ所にもあらゆる工夫が。

●北側の裏口は使用人たちの憩いの場。簡単な食事などはここで済ませたという。生活のドラマは、こうした目立たぬ場所に多くある。

●農機具が展示された土間は「**ダイドコロ**」。中央の柱は下大黒柱。上大黒柱が主人ならこちらは主婦。両者一対で家を支えていた

**川越道緑地古民家園内
「小林家住宅」**

●開園時間：午前9時～午後4時30分
●休園日：毎週月曜日
●入園料：無料
●問い合わせ　525-0860
　立川市歴史民俗資料館

●トイレも2種類ある。漆塗りの便器は身分が高い人(客)用。そうでない人は木製。差別というより、礼節の産物と見た方が適当か。

ゴロさんの独断毒語 ⑤

街頭詩人

先月、詩集を街頭で立売りをしていた話を少し書きましたので、今回は「街頭詩人」の回想を書くことに致します。もともと、詩人というのは「貧乏」の代名詞みたいなものですので、街頭に立って売るくらいが丁度、身分相応かと思っていた矢先に、城米彦造さんの話が『幸福を売る黒い帽子』という見出しで新聞に出ておりました。城米さんは昭和二四年から有楽町の駅頭に立って、自作の小さな詩集を売っていた、いわば「初代・街頭詩人」で、私は城米さんのお宅へ表敬訪問をした記憶があります。

昭和二四年といえば、まだ日本が戦禍から立ち直れない頃で、その時に駅頭に立って詩集を売って生計をたてていたというのですから、リッパなものです。私は「二代目」のお教しを頂いて有楽町の構内に立って、週刊詩『ん』を売りはじめました。週刊ですから、こしらえる方も大変ですが、「立つ」ことはもっと難儀で、はじめの頃は「身の置場もない」ほど、オドオドとしておりました。

もの陰から手招きをする男がいます。近づいてみると百円玉を出して、――一冊、くれ。

どうして、売手の私の前に来ないのだろうか。シャイな性格なのだろうか。とにかく、その五十格好の労務者風の男が、一冊百円の、わが週刊詩『ん』を買ってくれた第一号であった記憶だけは残っております。

別の日、ほろ酔い加減の人がポケットから、ありったけのコインを私に握らせ、これで『ん』を一冊くれという。私、百円玉をひとつ抜いて頂戴し、あとはお返しして『ん』一冊を手渡す。

――正直なやっちゃなあ、お前は。そんなこっちゃ、出世せんぞ。

――いえ、出世したからこそ、こうして東京のド真ん中で詩集を売ってるんです。

――ワッハッハッ、こいつぁ面白え。おい、買ってやれ、買ってやれってんだ!

頼みもしないのに、仲間や通行人に呼び掛けてくれる「親切」な人もおりました。

――おい、詩集だぞ、詩集。解ってんのかよう、おめえら、詩集だぞ!

駅構内にそのほろ酔い加減の人が仲介をしてくれている、そんな日もありました。一日、五冊しか売れなくて、お腹がすいたのでラーメンでもと思って店に入ると、醬油ラーメン五百円。なんとも情けない気分になった日もあります。

はじめ私は、詩集といえども「売り手」一人に「買い手」多数だと思っていたのですが、実は「売り手」一人に「買い手」一人なのだと気が付きました。「買い手」は独り敢然として私の前に立つのです。あるとき、中学生くらいの姉妹でしょうか、相談して五十円づつ出しあって一冊買って頂いた光景は、今も眼底に焼き付いております。今日でも、有楽町駅の私が立っていた場所に通りかかると「只の気持ち」では通り抜けられません。

(やまだごろう・詩人)

イラスト 綾 幸子

表紙の人 伊藤公代さん(上砂町)

えくてびあんが新版になって、表紙にはじめての女流登場。伊藤さんは松中幼稚園でバレエ教室を主催してその指導にあたっておられる他、厚生省認定の「健康運動指導士」の資格をもち、公民館健康体操の講師もつとめられている。さらに昨今はフラダンスの特訓中という、ご自身、溌剌そのものの人。一方、文化活動としては、子供たちに本を読んで聴かせるという、いわゆる「ストーリーテリング」の分野でも活躍中。この写真、昭和記念公園のクリスマス・ツリーのライトのもとでの撮影。

(於・昭和記念公園/撮影・細江英公)

東風

ものを見る眼というのは、どのようにして養われるのであろうか。ある時、幸町にある「古民家園」を訪れてみると、なるほど歴史を経た屋敷というものは立派なもんだなあと、漠然と眺めていた。ところが掛りの方が説明してくださるのを聞いていると、漠然と見ていた時とは理解度が雲泥の差なのであった◆これは、わがえくてびあん読者にも、その一端でもいいからお知らせをして、観察眼を拡げていただけたらという気持ちから、今月の「えくてびあんの眼」は古民家園の「見方」というテーマを選んだ次第である◆今や世は「解説時代」といってもいいかもしれない。ひと昔前は、たとえばスポーツの実況放送でもアナウンサーひとりで放送をしていたものだが、近ごろは「解説」付きでないと間がもてないほどに、定着してしまっている。なにげなく、その解説を聞き流して「当り前」になってしまったが、実は「視る眼」をわれわれは怠って、それが日常茶飯になっている結果なのであろう。それだけ、私たちの生活から「驚き」や「発見」が消えていってしまってるのであろうか◆だが視る眼で一番大切なのは、ほかでもない、「人を視る眼」なのにちがいない◆こがらしや 街に吹かるる えくてびあん

【第二次えくてびあん同人】
編集 新井紀美子/大久保清志/小林康史/空谷 空/山田五郎
デザイン 池田隆男/AMNET DF
写真 中村 伸/五東幸平

えくてびあん 12月号
第18巻 通巻185号
平成11年12月1日発行

発行 えくてびあん編集工房
〒190-0012
東京都立川市曙町2-17-5 杉田ビル3F
TEL. 042-528-0082 FAX. 042-528-0065
編集人 立井啓介
発行人 名尾居真
印刷 (株)大廣社

第1回えくてびあん杯争奪

立川べーごま選手権

杉田富雄選手 曙町・ビル管理業

第1回戦E組

木村貴浩選手 曙町『木村屋酒店』店主

幼馴染み対決は稀にみる好戦。軍配は木村選手

今回は幼馴染み決戦。ともに曙町で御商売をされている旧知の仲の二人だ。ちなみに本選手権で使用している「トコ」を提供してくれたのは木村選手。両者とも以前から参戦への意欲は満々。しばし少年時代に戻り、敵味方に分かれての真っ向勝負と相成った。技術的にもほぼ互角の戦いは、まず杉田選手のポイントで幕を開けた。が、2投目以降は木村選手が連続でポイント奪取。ほんの少しのタイミングのズレが災いした杉田選手、途中2ポイント連取し挽回を狙うが、木村選手のコマの安定感を崩すことができず、遂に試合終了。実力伯仲の好勝負は木村選手に軍配が上がった。「タカちゃん、相変わらず強いねえ」とは杉田選手の弁。

真味百撰 32

ステーキハウス テキサス

曙町2-17-5 杉田ビル2F / 522-6214
11:30〜22:00(ランチ11:30〜14:00) / 無休

いつ来ても変わらぬ味わい カジュアル・ステーキハウスのパイオニア的存在

カントリー&ウェスタン一色の店内で、美味いステーキを手軽な値段で味わう。ステーキハウス「テキサス」は、20年前の開店時から不変のスタイルを今に貫いている。「いつ来ても同じ味、同じ雰囲気。安心して召し上がっていただけるように心がけている」と語るのは店長の田中敏昭さん(50)。オーストラリア牛の仕入れルートを独自に持つことで質の安定化をはかり、メニュー構成を合理化することで値段を抑える。内装のイメージ作りも含め画期的といわれたこのスタイルは、御馳走の代名詞だったステーキをカジュアル化することに成功。その一方で各地に類似店が現れるという思わぬ「弊害」をも生み出した。「まあ"有名税"だと思ってあきらめてます」と笑う田中さんの言葉に、元祖としての自信と余裕が伺える。「20年前にいらしてた家族連れの子供さんが、今度は自分の奥さんと子供を連れてやってくる。それが何とも云えない喜びですね」。

通常1750円のビーフステーキ(225g)が1350円、1150円のハンバーグステーキ(225g)が900円で味わえる「ランチタイムサービス」が好評を博している(ステーキ、ハンバーグともにライス・サラダ・コーヒー付)。

赤川作品十二撰 5

「わらべの記憶」

埼玉県行田市

埼玉県行田市の国道一二五号線沿い、中央商店街に全部で三十九体の像を造りました。これはその内の一体です。足袋で有名な城下町・行田は昔から交通の要所として栄えました。道路の整備に併せ電線の地中化工事が行われ、これらの像は、地上に現れた変電機の上に一体づつ設置したものです。

三十九体もの像を一度に製作したのは初めてで、構想から完成までに二年近くもかかりました。製作にかかっている時はいつも「これで死んでもかまわない」ぐらいの気持ちで行うのですが、この時はホント、大変でした。

自分の作品の中でも「和」の雰囲気のものは珍しく、そういう意味では新境地だったかも知れません。自分たちの街の歴史を大切にしつつ、美しい街並み作りに励む行田の人々との、いわば共作といえるでしょう。

（1998年制作・赤川政由）